

共生社会の実現と男女共同参画

「障がい者と共に歩む 父親として感じていること」

障がい者と健常者がお互いの存在を認めながら、共に生きていく社会（共生社会）の実現に向けて、「障害者基本法」の改正（2011年）「障害者総合支援法」の制定（2013年）、「障害者雇用促進法」の改正（2016年）等、ハード面の整備は、近年なされてきました。しかし、人々の意識等ソフト面の水準は、残念ながらまだ低いのが現実です。私たちは、こうした課題にどう向き合っていけば良いのか。障がい者のわが子と共に歩む父親としての私の体験を、男女共同参画の視点から伝えたいと思います。



しみず福祉のまつりにて
次男といっしょに

わが子と共に歩んだ 37年間を振り返って

次男の誕生から小学校 卒業までのステージ

わが家の次男は、1980（昭和55）年生まれの37歳。ダウン症です。幸い、誕生直後から静岡県立こども病院遺伝外来、「静岡県ダウン症児の将来を考える会」地域の障がい児も受け入れていた「認可保育園（かぜのこ）」の療育チームの支援を受けることができました。当時、障がい児をゼロ歳児から受け入れている保育園は、県下ではわずか。次男は、ゼロ歳児から支援チームによる手厚い療育指導を受け、様々な人々と接する中で、健常児と分け隔てなく育てられました。保育園の保護者も、自分の子どもに向ける温かな目線で、同じように次男に接してくれました。保護者会の活動が盛んで、活動を通して、まさしく「共生」を実感できました。妻は専門職としてフルタイムで働いており、どうしても仕事を続けたいという強い意志がありました。家庭に留まらず、社会の中でこの

子を育てることはできないか、方法を模索しました。欧米では事例がたくさんあり、「幼少時期から社会性を身に着けさせることでEQ（心の知能指数）は高まる」と、県立こども病院遺伝外来の先生は、私たちの背中を押してくれました。家族を含めた周囲の支援体制にも恵まれ、妻は仕事を続けながら次男の子育てに取り組むことになりました。

次男の療育にもひとつの見通しがついた頃、「次男が、これから社会の中で生きていく力をより身に付けていくためには、弟や妹がいた方が次男にとって良いはず」という結論に達しました。その後5歳下の妹、8歳下の弟を持つことが出来ました。次男と兄弟との関係は、現在もとても良好です。親として、次男の存在は、子どもたちの人間性や価値観に大きく影響していると感じます。

保育園卒業後、地元の小学校の特殊学級に進学しました。当時の清水市では、放課後の育成児童会が体制整備の途上にあり、健常児とともに、障がい児も対象とした制度はありませんでした。それならばと、親がフルタイムで働く子どもたちの、放課後や夏休みといった長期休み中安全で豊かな生活環境を確保するために、保育園の保護者活動を共にした親が集まりました。指導員の献身的な支援のもと、自主運営の「学童クラブ星の子」を立ち上げることができました。健常児と、次男も含めて特殊学級に在籍する児童も対象としました。

私は運営委員長として、立ち上げに関わりました。場所探し、財政面の裏付け、指導員の確保等苦慮しましたが、今から思えばよくやったと思います。保育園時代の健常児の仲

間とともに過ごした学童での6年間も、次男にとっては貴重な財産になりました。

次男は、IQ対比でEQが高く、特に対人コミュニケーション力がとても豊かです。この点では私を上回っているかもしれません。幼少期の様々な人々との交流が、彼の力を引き出してくれたと私は思っています。

この時期は、周囲の関係者の支援もあり、次男の療育環境を高めることに、私は父親としての関わりをもてた時期でした。背景として、私が次男の療育に関わることに對して勤務先の理解があったことは確かです。

次男の中学校以降社会人になるまでのステージ

中学校・高校は、静大附属養護学校（現・静大附属特別支援学校）、その後静岡県立富士見学園で生活し就労指導を受けました。社会人として、授産所を経て、就労支援施設で毎日元気で働いています。彼は音楽や写真が趣味で人生を楽しんでいます。

この期間、私は仕事にべったりでした。次男を巡る環境整備に関わる機会も、ほとんどなくなっていました。妻に任せっきりで、今思えば、好ましくない父親でした。次男に限らず、子育てに関しては妻に依存、向き合ってきた自分がいました。職場における自分の立ち位置、職場をめぐる社会環境の変化に、より厳しい局面はあったのは確かです。それにしても、もう少し子育てに向き合っていく姿勢があってもよかったのではないかな。今、とても反省しています。妻との会話や子どもたちとの会話の中で、このこと

に関しては、自己反省と読書の気持ちを伝えていきます。

私の定年退職後のステージ

勤務先では、57歳でライン管理職を外れスタッフとして働きました。このころから私の気持ちに変化が生まれました。仕事の面では、ライン管理職を外れたことで、時間的余裕ができました。その結果、帰宅時間が早まり、家族と過ごす時間が多くなりました。

そうした中、60歳定年後の家族との関わり方、社会との関わり方は、どうしたらよいのか、どうすべきなのか、を考えるようになりました。自分の中で自問することが続きました。定年前のスタッフとして働いた3年間は、定年後の生き方を方向づける上で、非常に貴重な時間だったと思っています。このような働き方ができたことに、勤務先には感謝しています。

定年後、在職中に会得したスキルを生かして、コンサルタントとして起業しました。様々なクライアントと接するなかで、視野が広がり、同時に自分の役割、生きがいとして、社会的な関わりを持つことに自分の中で扉を開いていきました。

静岡県男女共同参画センター「あざれあ」で開催された県主催の講座で、静岡大学の日誌教授、静岡県立大学の犬塚教授のレクチャーを受ける機会に恵まれました。その中で、「男女共同参画」「ワーク・ライフ・バランス」「共生」の意味するところを、わが身のこととして、落とし込むことができました。「男女共同参画」「ワーク・ライフ・バランス」という概念が、まだ浸透していなかつ

た時代背景の中で、定年前の私は、自分の子どもの環境整備に思いを寄せることはできても、広く障がいを持った子どもたちのこと、社会への関わり等「共生」の意識が自分の中では芽生えていなかったと感じます。結果として、私の中では、家族との関係、社会との関係という点で「希薄の期間」となりました。幸い定年後、こうしたことに気づくことができました。

還暦を境に、私の中で本誌69号のテーマとなった「シニアライフの男女共同参画」がスタートしました。次男が通所している福祉法人の役員・保護者会長、所属する静岡市清水手をつなぐ育成会WEB広報担当、NPO法人青少年就労支援ネットワーク静岡のサポーター、共生社会の実現をめざすボランティアグループ「ゆう・ゆう・ゆう」のサポーター等、この7年間、様々な活動に関わってきました。

わが子が生きていく環境にとどまらず、障がいの有無、性別、年齢に関係なく、すべての人々がお互いを理解しながら、よりよい社会を創造していくという理念の実現。そのことに、微力ながら自分も関わっていきたいと思うようになっていきます。一人ひとりを大切にしながら共に歩んでいく「共生」の概念に共感できるようになってきました。

県外出張の時は除いて、在宅時には私は家族の朝食・次男の弁当を準備する日々です。以前には想像できなかったことです。弁当作りを通して、「食の安全・安心」への関心も深まり、何にも増して、次男や家族との会話の機会が増えました。次男を含めた家族との関係性が以前よりも豊かなものになっていると思います。この7年間で自分は変わったと

実感しています。

社会との関わりという点で、知的障がい者の親の会の関わりを通して私が感じていることを以下に述べます。

知的障がいをもつ子どもの親の会「静岡市清水手をつなぐ育成会」への関わり

育成会とは

（全国手をつなぐ育成会HPより抜粋）
全国組織で各都道府県、市区町村のほとんどにあり、全国に二十四万人強の会員が存在。知的障がいのある人や家族が暮らしやすい、生きやすい社会をつくるために、障がいについての誤解や偏見の解消、生活上の権利侵害や差別の防止、障がいのない人と同じことがあたり前にできる制度や仕組みを行政、市民に働きかけていくといった活動を中心に取り組んでいます。

私は6年前からWEB広報担当として会の運営に関わるようになりました。6年前、初めて総会に参加してみても、会の運営は母親主体で実施されていることを実感しました。父親である自分にもできることはないか考えてみました。当時、清水育成会の広報は紙媒体のみ。WEB情報を発信することで、私も会の活動に寄与できるのではないかと考えました。常に会の運営に関わることはできませんが、WEB情報の発信、メンテナンスは場所を選ばず取り組むことができます。私から手をあげて、WEB広報担当をすることになりました。それ以来、会員・他地域の育成会関

係者との交流の輪が、私の中で少しずつ広がってきています。

キャラバン隊の活動

こうした中で、活動のひとつであるキャラバン隊活動に興味を持ちました。キャラバン隊は、育成会役員が中心となって、一人でも多くの人に知的障がい者のことを理解し、知ってほしい、という思いで行っています。民生児童委員、ボランティア、教員、一般市民、自治会、地区社協役員、高校生、中学生、水泳指導者、行政職員のための研修会等に出かけて、公演活動を行います。全国で展開されている啓発活動で、県内では清水育成会と浜松育成会が活動しています。

清水育成会キャラバン隊

キャラバン隊（ダイバニック）の活動
（清水育成会資料から引用）

キャラバン隊は、疑似体験などを通して知的障がいについて一般の方々に知ってもらう「きっかけ作り」を目的とした、親たちによる啓発活動です。平成21年結成以来36公演、延べ2,400人以上の方に観てもらいました。「知的障がい」（例：自閉症・ダウン症など）について、ロールプレイ・劇やワークショップ（疑似体験）を通して、障がいのある人がどんな気持ちで生活しているのか、どう接してほしかどんな不便や生きにくさを抱えているのかといったことを一緒に暮らしている親の感性で伝え、一人でも多くの方に知的障がい児者のことを理解し、知ってほしいという願いから公演活動を行っています。



清水育成会（会長佐野可代子さんに取材）



キャラバン隊の活動は、わが子に寄り添いながら、社会の中で前向きに生きているお母さんたちに支えられています。公演は「見える化」されていて、とてもわかりやすく、「知的障がい者」のことを理解する上で大変役立ちます。貴重で今後も続けていきたい活動だと思います。キャラバン隊の活動には、社会を変革していく潜在的な力を感じます。様々な人々（例えば父親、兄弟等）がこの活動に関わることで、障がい者をめぐる環境がより豊かなものになっていくのではないかと。そのことは、男女共同参画社会の実現の一翼を担っていくことにもなるのではないかと思います。

これは、キャラバン隊に限らず会の活動全般に言えることです。

～父親の関わりについて～

育成会副会長小笠原勝さんは軽度の知的障がいをもつ子どもの父親で、企業を退職後、会の活動に関わるようになりました。育成会の他にも地域で社会的な活動をして

います。父親の子育て、社会的活動への参加に、育成会としても取り組んでいくことの大切さを熱く話してくれました。これから、父親の輪を広げていく第一歩を歩みだすことで意気投合し、早急に具体的行動を起こすことになりました。自分たちの思いや経験を若い世代の会員の父親たちと共有し、次世代の人々に伝えていくことも自分たちの役割だと、強く感じました。



浜松育成会

（キャラバン隊リーダー 高橋久美子さん談）

浜松キャラバン隊は、8人のメンバーの中に2人の男性がいます。とても活躍してくれていて本当に助かっています。メンバーに男女がいることで、おしゃべりに夢中になりすぎて会議が進まない時は男性の1人がささっと方向を正してくれたり、もう1人の男性が決断に導いてくれたりとそれぞれの特性が出ていて、いい感じの集まりが毎回築けています。



男性のメンバーは、とても気が利きます。1人は定年退職してから活動に参加しています。この方は障がいのある子どもがいない賛助会員です。この方の意見を紹介します。

・父親、男性の参画について

出来るところから参加してもらう、促していくことかと思っています。父親は、啓発が必要であることは理解しています。活動の中で、お手伝いをお願いしてみたらどうでしょうか。例えば、公演を観ることから。キッカケを作り、知ってもらうことで、随分響くと思います。

・男女年齢問わず参画について

どこのキャラバン隊も、児童や学生へ講習・公演を行い、すそ野を広げていくことが必要だと思います。若い人の柔軟な心は、素直に受け入れてくれます。

一般の人々へは、日常にある触れ合いより、まず知ってもらうことから始め、不安を取り除き、「共に生きている」感覚をわかってもらうことだと思っています。活動に参加しなくても、理解が得られれば、障がい者も共に過ごしやすい社会が生まれるものと信じます。

取材協力… 清水育成会（佐野さん・小笠原さん・岡田さん・大滝さん・寺田さん・須田さん・名倉さん・遠藤さん）

浜松育成会（高橋さん）

父親の意識の喚起が第一歩

還暦を境に私の中で、子どもへの関わり方、妻への関わり方、家族への関わり方、社会への関わり方に変化が生まれました。子どもの幼少期以降、私の子どもへの向き合い方は、母親との間でかなりの温度差があったことは確かです。環境的な背景はあるにしても、意識の中でどこかで逃げていた。正面から向き合ってこなかったと感じています。そんな私が変わっていくきっかけは定年退職でした。父親が子どもたちの成長に大切な環境整備にもっと参加すること、子どもにとっても、母親にとっても、父親本人にとってもより豊かな生活が実現されるのではないのでしょうか。私は自らの体験を通して心からそう思います。

男女共同参画社会とは、「男女が互いにその人権を尊重しつつ責任も分かち合い、個性と能力を発揮することのできる社会」と規定されています。男性自身の固定的性別役割分担意識の解消を図るとともに、長時間労働の抑制等働き方の見直しにより、男性の地域生活や家庭生活への参画を進めるとしています。

障がい者が安心して暮らせる環境の整備には、地域や関連組織による共助、さらに公助としての行政による支援の充実が不可欠ですが、障がい者と共に歩む保護者（父親・母親等）の自助が基本です。

私はこれから、同じ環境にある仲間との連携を強め社会とのつながりをより広げ、次の世代にバトンを渡していく存在でありたいと思っています。（赤堀三代治）



若い世代の ジェンダー意識について

「専門家」任せから「当事者」意識へ

近年、男女共同参画のための様々な施策が講じられていますが、制度を利用する私たち一人ひとりもまた、「当事者」としてジェンダー問題と向き合っているかを問われているように思います。というのも、とりわけメディアを通して見聞きする若年層の発言には、既存のジェンダー教育に理解を示しつつも、懐疑的な考え方があるからです。ここでは若者のジェンダー意識について考えてみます。

現代の若者には、基本的な男女平等意識は根づいています。しかし、フェミニストなどに対して「女性の権利を主張しすぎではないか」「男性が抑圧されている部分もあるのではないか」といった意見があるのです。

この傾向は、すでに男女共同参画が推進され、性差によるあからさまな不平等が是正された世代だからこそその意見なのかもしれません。それは、男女共同参画推進の恩恵への無自覚さであり、苦難の歴史の中、女性の権利を勝ち取ってきた先達フェミニストの、功績と尽力への無理解・無感謝にも繋がる考えです。しかし、それは「専門家」任せのジェンダー意識から、自分で考える若者らしい「当事者」意識への移行ともとれるのです。



まなざし村

例えば、ネットコミュニティでは、ここ数年、フェミニズム批判の言葉として「まなざし村」という造語が使われるようになりました。「まなざし村」とは、SNS等で活動中のフェミニストの中で「女性に性的なまなざしを向けること」自体に対し批判的な層の人々を皮肉る言葉です。例としては、創作物の性的表現や、公共のイメージキャラクターのイラストが、性的であるとして撤回や回収を求める人々を指します。最近もある自治体のイメージイラストが、女性の豊かな「カラダ」を強調していて問題になり、撤回されるということがありました。つまり、女性の権利侵害に過敏になるあまり、思想や表現の自由が侵害されてしまうことに対しての、不満からくる言葉なのです。

もちろん、実際に不適切な表現もあり、そのすべてが不当で過剰な要求とは言えず、公序良俗に貢献している面もあります。ですから、「まなざし村」のように「女性からのハラスメント認定に対して、鵜呑みにせず、その真偽を考えてみる」「男性への抑圧について考えてみる」という姿勢は、一考の余地があると私は考えます。

メディアからの情報だけでなく身近な意見を聞くために、私の所属する大学の学部生・院生に日本のジェンダーについてインタビューしてみました。男女差別については「ほとんどない」「あまり感じない」という意見が多くみられました。それ故に、就労時の女性枠など女性に配慮した公的制度に疑問を感じるという意見もありました。

私はそれらの意見に対し、制度の意味とそれが成立した経緯を若い世代にもしっかりと周知し、その必要性を分かって貰うことが必要だと感じました。同時に、男性に配慮した制度も検討することで公平性を保つことも必要だと感じます。女性も男性も抑圧されないよう、互いに配慮すべきだと私は考えます。

(酒井美優)



学生に こんなことを聞いてみた！

●日本社会は男女平等？

- 性別によっていろいろなことが左右されてしまう部分は、男女ともに大きい。固定観念により、男女共に苦しんでいる部分はあると思う。

日本人(女)

- 女の方が損をしていると言われがちだが、両性とも制度で損をしているところがあると思う。

アメリカ人(女)

- 男の方が高い地位が得られる。

中国人(男)

- 性別で幸福度は決まらないと思う。

韓国人(女)

●専業主婦(主夫)についてどう思う？

- パートナーが主婦(主夫)なのはいいけれど、自分は嫌だ。

日本人(女)

- 社会と接点がないのは気の毒。育児でストレスがたまったらSNSで発散するのも効果的。

日本人(男)

- 共働きでないと経済的にとても不安。

日本人(女)

- 男女とも特に理由がないなら、働いていないのは不自然に感じる。(子どもは祖母が見る)

韓国人(女)

- 男女とも働いているのがいい。

アメリカ人(女)

- 別に推奨しないが気にもならない。

韓国人(女)

- 働くか働かないかは本人の意思を尊重したい。

韓国人(女)

●企業の女性枠について

- 実力主義にすべき。男女は関係ない。

日本人(男)

- 女性が不利なので、枠を作れば平等になると思う。

日本人(女)

- 女性の雇用の安定のために必要。

中国人(男)

- 女性の考えを取り入れるべきだし、男性だけの会社は成功しない。

アメリカ人(女)

- 女性枠で入社すると余計な反感を買ってしまうと思う。

韓国人(女)

●大人世代から

学生たちから、ジェンダー差別の経験や日本社会のジェンダー秩序に対する批判的な意見が出てこなかったのはなぜだろう。

大学が一般社会に比べてジェンダー・フリーだからか。ジェンダー論や女性学などで学んではいても、実際の個人的経験が乏しいからだろうか。

ただ、このような若者たちを大所高所から批判するのはよくない。これまでよりもっと自由な発想で、女性と男性の両方に十分目配りしたジェンダー意識を持てる若者たちだと思う。

(須藤)

そんなこと
フツー!



子どもたちが作り出す 「当たり前」の 男女共同参画社会

行政広報誌に

「すべりこむジェンダー」

菊川市に住み始めて5年目。あたらしい生活の場を知るために、これまではあまり見なかった原や市の情報を伝える冊子やパンフレットに、ひと通り目を通して。

最近も、ある市議会議員が発行した、1枚のビラを手にとった。その時、掲載された写真が白黒写真のよつに黒いこに気がついた。よく見るとどれもこれも背広を着た男たちだけである。女性は1人もいなかった。ビラを配布した議員は、これになんの違和感も持たないのだろ。

改めて「広報菊川」のバックナンバーをもらって見直してみた。地域の役員を紹介する集合写真、地域に尽くして表彰された人たちの写真など、市長と並ぶ写真はみんな男ばかりである。地域社会のどこに女がいるのか。長年、地域の表舞台で活動するの男、その経歴を理由に表彰されるの男になる。したがって、広報誌に掲載される写真は男の背広姿で黒くなる。

これが私たちの今のあり様である。女性が出てくる時は「活躍する」特別な人で、誌面に色を添えることを期待される。このような広報媒体は、私たちの地域社会をシンボリックに示すものである。行政担当者や議員から男女共同参画政策はすっぽり抜け落ちている。(1)

「君」と「ちゃん」から

「さん」へ

次にこの地域社会で育つ「子どもたちの今」に近づいてみよう。私は3年前から、子どもたちの登下校を見守るスクールガードをやっている。都合で休むときもあるが、おかげで地域の子どもたちをよく知るようになった。「ミーちゃん」「マユちゃん」「ミヒロちゃん」「ハルちゃん」「ケンちゃん」「ダイちゃん」……。シニアになつてから住みだした私と、子どもとの接点は、このスクールガードの仕事で生まれた。子どもはすばらしい成長にある。1年生は2年生、3年生となる。大きなランドセルを背負って転んでいた子の身体は、すんずん大きくたくましくなる。ランドセルが普通の大きさに見える。

外目にもこのように成長する子どもの姿は妬ましい。それと同じスピードで私の老いが進む身体。もう一つ知ったことがある。それは男の子も女の子も同じ「さん」づけで呼び合つてた。

私たちの子どもの時代の記憶では、男の子には「君」をつけ、女の子には「ちゃん」をつけて呼んだ。先生も親たちも子どもたちもそう呼んでいた。「君」は凛々しく「ちゃん」は可愛らしい。呼び捨てはいけないと教えられ、そのよつに男の子と女の子を別の呼称で呼ぶことが、相手を尊重していることの証だった。

大人になるといへませんが「ちゃん」

ではおかしい、女性は「さん」づけにしていた。今でも小中高から大学までの男女たちを、親しみを込めて「シダ君」などと呼び、昔の時代に戻る。このよつに男と女を社会の中で呼び分ける感覚は、戦後生まれで新しい憲法を学んで育った「私たちの子ども時代」文化として守るべき規範だった。

その「君」「ちゃん」が、スクールガードをしている私の周りで、私の愛犬フッチと遊ぶ子どもたちの口からは出てこない。「ダイスケさん」「リカさん」と呼び合いながらフッチとふざけ合っている。

大人の社会では一般的に「サトウ課長」とか「スドウ先生」など、その人の役割やポジションをつけて呼びかけることで、お互いの関係を確かめることが普通である。そう呼びかけられることでその人は、その役割や地位を自分に内面化する。それが上下関係をわきまえた態度だと考えている。

それだけでなく、女性が夫を「主人」と呼ぶことに関してさまざまな批判があるにも関わらず、そついつと「常識のある人」と受け止められる文化は根深い。言葉は難しい。広辞苑によれば「主人」とは①一家のあるじ、②自分の仕えている人、③人を賣んでいう語、④妻が夫を指していつ称、⑤客に対してこれをもてなす人と出てくる。夫のことを主人という人は④の言い方を使っているのだから、その言葉には①や②の意味もあるから批判的感情が湧く。

しかし今、子どもたちの口からは「ケンタさん」「マユちゃん」と心地よい「さん」の音が発せられる。「初めにいひあひき」である。「成ったものいひあひき」に成ったものは何一



つなかつた」(三八)ハネ福音書。子どもたちの「こ
とば」に耳を澄まして、時代は男女共同参画に
向かっていることを確信する。子どもたちが大人に
なったとき、言葉によって男女の共同性は実現
していくだろう。

子どもとジェンダー

しかし言葉だけでは片づけられない根源的な
問題がある。性器の形による性別「セックス」
である。今やこれによって男性女性という単純
な二項対立はなりたないが、そこには踏み込
まず、女の子と男の子にスクールガードの帰り
道、問いかけてみた。

「女の子だけど男の子のほうがいいと思つて
くるっ」。まるで大きな声でこんな言葉が返
ってきた。

「男になんたたくないー おちんちんなんかあ
つたら邪魔ー おしっこするのが面倒ー」。私
はグラグラ笑いだした。

続けて、「女は赤ちゃん産める。赤ちゃん
がお母さんって言ってくれるからやる気がで
るー」。「そつだねー」と私も引き込まれた。

もう一つ訊いてみた。「男の先生と女の先生
と違うところはあつたの？」。

すると今年初めて男の先生が担当になった
という子が、「女の先生と違って男の先生の言
葉や言い方がかわい」。「それはどんなことな
の？」。「何とかがテストとか固い言い方を
するから」と興味深い答えをしてくれた。

子どもたちは「セックス」だけではなへ「ジェ
ンダー」としても自分を認識しているのだ。言
葉や言い回しの中に、ジェンダーを見つけた鋭
さにも驚いた。

別の日、男の子数人に、「ねえ、女の子の方
がよかったと思つたことある？」と聞いてみた。
スクールガードでいつも会う顔なじみの関係だ
が、男の子は先の女の子ほど打てば響く反応で
はない。想定外の質問に戸惑つたのかもしれない。
それでも女の子と同じように「セックス」
から返してきた。

「いやだよー 女になんたたくない。だって子
どもを産むとき痛いー」。彼はお母さんから聞
いたのか本当に痛そつた。

もう1人の男の子に、「男の子は嫌だと思つ
ことある？」と聞くと、「男はガチンコでケン
力しなきゃならないからいやだよー」と、大きな
身体に似合わない弱気な顔になった。

その時、別の子から聞き捨てならないつづや
きが聞こえた。「女の子なら勉強ができなくて
もいいから」。

即座に私が、「男の子は女の子より勉強がで
きると思つている？」と言つと、目の前にいた
仲良しの女の子に目を向けて、「そんなことな
い」と自説を引っ込めた。そして、「おじさん
が来て、女の人にはやさしくしなさいって言つ
てた」とその場を収束した。

午後の3時過ぎ、子どもたちと私、犬のブッ
チ以外、人の姿がない町の通りで、こうして楽
しく道草を食つた。

男らしさ・女らしさ

考えてみると私たちは生まれてすぐ性器の形
を見て「男の子です」「女の子です」と言言さ
れる。そのあと「男らしくしなさい」「女らし
くしなさい」とあらゆる大人から言い続けられ
教育される。これを否定することなど思いもよ

らなかつた。生物学的性差
が自然、すなわち絶対的眞
理だと信じられていたから
である。しかし、「人は女
に生まれるのではない。女
になるのだ」(ポーヴォワ
ー)というジェンダー概念
はこれを突き崩した。

スクールガードとして子
どもたちと触れ合う短い午後
は、改めてそのことを確認できる時間である。
子どもたちは「男」と「女」になるその途上
にいるからである。

元気で明るい女の子の言葉は、子どもを産む
という自分の「セックス」を社会的な価値とエ
ネルギーに繋げ賛美している。それとは反対に
男の子は、自分に期待される周囲の大人からの
プレッシャーを抱えているように見えた。

勉強してお金を稼がなければならない、女の
子にやさしくしなければならぬ、など周りか
ら求められる男の役割を意識し、重荷に感じ始
めている。そのためか明るくはしゃぐ女の子の
突き抜けたようなパワーが、男の子にはない。

この子どもたちが大人に なったときには

今、子育てしている世代の人たちも、家で子
どもに向かつて「女の子だから女らしくしなさい
い」と言っているのだらうか。「女らしい」と
いう言葉にはその人が持つステレオタイプな
偏見や規範的判断が含まれていると加藤秀一
はいつ。(ii)

それが正しい考え方だと信じてきた今の太



人たちには、これに反論するこ
とは難しい。また同様に「男の
子だから男らしくしなさい」と
いつことも、自分がイメージす
るステレオタイプの「男らし
さ」があるのだらう。多くの
人はそのことに無自覚である。
家庭のなかで親が子どもに
向かつて言つたことに、私たち
は口をはさめない。そこで子
どもに代わつて加藤秀一に反論してもらおう。

「らしさ」が単なる事実の記述ではなく規範
の押しつけてあるということは、それが「女らし
くしなさい」といった命令文の形で使われると
きに、いっそうはつきります。単なる事実を
命令するなどという奇妙なことがあり得るで
しょうか。女が女らしいということが、たとえ
ば魚がエラ呼吸するのと同じように単なる事
実であるとすれば、「女なんだから女らしくし
ろ」という命令文は「魚なんだからエラ呼吸し
ろ」という命令文と同じぐらいナンセンスであ
るはずだ。(139頁)

子どもたちが大人になったときに、こんな話
が繰り返されてはならない。そのために
は今、私たち大人が学び自分と社会を変えて
いかなければならない。そのスピードを上げ
なくてはならない。子どもの成長は早い。ダ
イスケさんもヒロさんも、あと10年たてば
立派な大人になっているからだ。(須藤八千代)

(i) 諸橋泰樹(2002)

「ジェンダーの語られ方。メディアのつくられ方 現代書館」

(ii) 加藤秀一(2000)

「ジェンダー入門」朝日新聞社